

# 火野葦平の新中国視察記

— 広東から、漢口へ —

増田周子

はじめに

火野葦平は、一九五五年四月六日から十日にかけて、インドのデリーで開催された「アジア諸国会議」に日本の文化問題代表として参加した。「アジア諸国会議」では、文化問題、政治問題、経済問題、宗教問題、科学技術問題など五日間にわたって、長時間多くの討議がなされた。火野は、「アジア諸国会議」の後やその途中で、デリーや古都アグラ、ジャイプールなどを視察して回り、インドの文化遺跡にふれた。インドを視察する中で、最も火野が関心を寄せたのは、カースト制による身分差別の実態であった。火野は、「権・財力にひしがれ ドン底にあえぐ貧民階級」で、次のように述べている。

インドにはこういうケタハズレの大金持とケタハズレの貧

乏人があって、中産階級が少ないのである。健全な社会構成とはいえない。おまけに四億の人口のうち一七%しか文字を解しないとえば、インド国の実態はいささか妖怪じみているとさえいえる。<sup>(1)</sup>

火野は、現在でも慣習として続いているカースト制により、不可触賤民身分として虐げられた人々に対する差別や、インドの貧富の差などについて見聞し、その不公平さについて考え、自身の見解を、エッセイ、評論等で発信したのである。

「アジア諸国会議」に参加した日本代表団の一部の二十八名は、インド訪問後は、一九四九年十月一日に成立した中華人民共和国、すなわち新中国を視察することになる。火野も二十八名の一人として新中国の視察に参加した。火野らはカルカッタ、ラングーン、バンコク経由で香港に一九五五年四月二十日に入国し、二十一日

より新中国を視察していく。火野の新中国訪問については、拙稿「一九五五年 火野葦平『アジア諸国会議』参加後―インドから香港、広東へ―」（関西大学『文学論集』二〇一五年九月）で、香港から新中国に入国し、広東に入ってから四月二十二日までの様相を記した。本稿では、その続きの、火野の新中国視察、すなわち、広東から武漢に至る状況を、火野の撮影した写真や、見聞記、日記などを用い、詳しく報告していきたい。日記については、筆者がすでに、翻刻し、明らかにした『中国旅日記』（『東アジア文化交渉研究』二〇一一年二月、第三号）を使用する。『中国旅日記』とは、横九・五cm、縦一三・五cmで「MEMORANDUM」と書かれた手帳であり、全一六八頁である。一九五五年四月二日から五月四日までの新中国の訪問中の出来事を詳細に綴った日記風のメモであり、当時の記録として貴重なものである。この中国の視察をルポルタージュ風に描いた作品『赤い国の旅人』（一九五五年十二月、朝日新聞社）にも、火野らしき人物が「私」として登場する。もちろん、『赤い国の旅人』は偽名で登場したりなどするので、完全な事実ばかりではない部分もあるが、この作品のものになった『中国旅日記』と照合すると、相当事実に近い部分が多い。そこで、『赤い国の旅人』や当時火野が発信した記事なども考察に使用したいと思う。なお、本稿で使用する写真のほとんどは、火野が撮影し、玉井史太郎氏が所蔵しているものである。



広州文化館 筆者撮影2011年

#### 一、火野ら一行の広東出発、四月二十二日

四月二十二日、火野ら希望者十四人は、西堤馬路にある「日本軍爆撃の跡といふ」（『中国旅日記』）嶺南文化宮に行った。愛群ホテルを八時に出発した。そこで「ネオンの字がさすがに立派である」（『中国旅日記』）歴史博物館を見学する。嶺南文化宮の写真が見当たらないので、現代の写真を掲載する。現代は、嶺南文化宮は広州文化館（広州現代芸術館）、という名称となっているが、場

所は一九五五年とかわらない。

また歴史博物館は、火野のとった夜景の写真が残っている。それと、広州文化館の掲示板に、ガラスケースに入れて飾られていた一九五二年の写真をあげておく。火野が訪れた一九五五年とほぼ近いのでこのような建物であったのだろう。

この歴史博物館は、半分は博物館にあるような文物、すなわち「○紙製の人形（陶器のやう）（入口に統計箱、竹片を箱に）○石器一六一四年前石器。○骨貝、甲骨文字、酒器、水器、兵器、鉄

器」（『中国旅日記』）を展示し、あと半分は革命文物であった。革命文物としては、鴉片戦争、太平天国の乱、辛亥革命、第一次国内革命戦争（一九一二～一九二七）国共合作時代、第二次国内革命（一九三七～一九四五）の展示もあった。火野は、立ちどまつて、そこに書いてある解説文を詠んだ。『中国旅日記』にはその解説文が次のように記されている。



1955年 火野葦平撮影



1952年 歴史博物館

### 広東抗日戦争時期

在八年抗日戦争中、広東方面的情况。在広東大陸。一九三八年十月十二日、日寇從惠陽大亞湾登陸、前後只十天。就從國民黨軍隊手中奪去了廣州市及其外团県、從而給廣東人民帶來了暗無天日的日子、…

在海南島 一九三九年二月十日日寇侵略海南島、海南人民亦遭受了空前的災難、…、終於取得了這次民族解放戰爭的偉大勝利

(『中国旅日記』)

火野は、「この二回とも作戦に従軍した私は、日寇の一員として、広東人に暗黒の思いをさせ、海南人を空前のわざわいに追い



沙面 筆者撮影 2011年



沙面 筆者撮影 2011年

こんだのである。(中略)文字どおり、足がすくんでそこから一歩もうごけないような苦しさだった。一人でかえりたくなくなって来た」(『赤い国の旅人』一三二頁)という。その後、「○ 解放戦争時期(一九四五～一九四九)広東解放入城式 海南島解放(一九五一)」(『中国旅日記』)の展示を見、外に出た。「明るい部屋から暗い夜のなかに出てほっとした。」(『赤い国の旅人』)とある。歴史文物館を見て、嶺南文化宮を「一巡する。ガンガン鉦を鳴らし、女優が喋つてゐる。粤劇舞台。映画館 運動場 いろいろなものがあ

る。管理費として入場料 銭をとるとのこと。」(『中国旅日記』)とある。午前十時ごろバスに乗り、愛群ホテルに戻った。汽車は十二時近くだから、まだすこし時間がある。火野は「自分で見たいと思うところには一個所も行っていない。しかし、今となってはもうやむを得ないから、沙面だけでも見ておきたいと考えた」(『赤い国の旅人』)。そこで、沙面に向かう。

○ 沙面に行かふと思ひ、タクシーをきいてみると、みんな政府用になつてゐてないとのこと。ふだんはあるのだが、メーデーが近づいて微用みたやうになつてゐるらしい。仕方がないので歩く。(中略) 近いと思つたのに意外と遠い。しかし、十分ほどだった。昔、ここにはアメリカとフランスの租界があり、バリケード、トーチカがあり、歩哨がゐて、なかなか中に入れなかつた。クリークを掘つて島にしてあるのだが、水が涸れてゐて、多くの民族がビツシリつまつて擱座してゐる。橋をわたる。暗くてよくわからない。奥には灯がたくさんソ連大使館があるとのことだがわからない。レーニン85年のためか、ロシアの写真が橋畔に陣列。豊富な樹木。橋に門があることはある。(中略) 三輪車(サンルン)を二台ひろつてかへる。涼しくてよい気持。(『中国旅日記』)

と記している。火野は、その時に初めて広東の街に洋車が見られ

ないことに気づく。火野は、広東作戦に従軍しているので、過去の広東の様子はよく知っていた。「昔は人力車がウヨウヨしていた、何台もうるさいほど寄ってきたものである」(『赤い国の旅人』)が、通訳の王さんによると今は三輪だけだが、バスや電車のような交通機関が完備すればなくす方針だと言う。火野は、『赤い国の旅人』に次のように記している。

支那の名物といつてよかつた洋車(上海では齡包平)がすっかりなくなつていいるとはおどろいた。バクチ、ドロボウ、売淫、乞食、などと同じく、人間が汗水たらしてひっぱる車に、同じ人間がふんぞりかえつて乗るといふのも「悪い考え」に属するというわけであろうか。三輪車も似たようなものだが、じかに足で走ると、ペダルをふんで車輪で走るとでは若干の差はある。新車をゆるさないで、三輪車はどれもこれもガタガタだ。政府は壊れるのを待っているわけか。

(『赤い国の旅人』一三三頁)

さて、ホテルに戻ると、「○ 中国政府から一人頭五〇円(日本金七五〇〇円)の支給金を和田さんの部屋でうけとる。」(『中国旅日記』) 火野は、「招待されたうへ、小使ひまでもとは、なんだかすまないやうだ。」(同)と記した。「小林義雄氏に表の珠江べりを散歩してみなさいとすすめておいたら、パンパンにたくさん出あつ

たらしく、火野さんのとほりだと、帰つてから笑つてゐた。」(『中国旅日記』) そろそろ広東出発の時間になった。「駅に行く」と羅培元さんや作家の陳残雲さんなどが見送りに来てゐる。陳さんと握手すると、ぜひもう一度広東にといふやうに、指でフォームを指さす。」(同)「見残したところの多い広東へ心残り。」(同)と感じながら火野は、広州站を午後十一時四十五分発の一等寝台車、青色七号に乗り、松岡武一郎、中村義麿氏らと同室で出発した。「松岡氏は田村泰次郎君と同室の親友とかで、いろいろな話をする。汽車はひどく揺れるが、疲れですごく眠つた」(『中国旅日記』) そうだ。

## 二、四月二十三日 広州から武昌へ

四月二十三日、火野ら一行は、午前零時頃より粵漢線を広州から武昌へと向かった。ほとんど一日中列車での移動だった。

うすら寒い。あまり高い山はないが、起伏に富んだ高原地帯を行く。清澄な武水北江の流れ。にごつた赤い川ばかり見なれた眼に、中国のすんだ川が珍しい。日本のどこかのやうである。坪石駅。すばらしい奇岩の聳立。水成岩だが見あげる高さにある。これが坪石といふ岩らしく地質学権威早坂氏の解説をさく。この一帯広東からずつと、土が赤い。坪石をすぎると、広東省から湖南省に入るのである。

(『中国旅日記』)

火野は、地質学の権威早坂一郎氏<sup>②</sup>より、地質について説明を受けながら電車での旅を楽しんだ。「みなそれぞれの分野におけるひとかどの人物ばかりであるから、自分の領域になると専門知識を開陳し、なかなか勉強になる」(『赤い国の旅人』一三四頁)と記している。吉岡金市氏<sup>③</sup>は、「相かわらず窓外の田畑をしきりに観察して、私たちに稲についての蘊蓄をかたぶけてくれる。広東方面ではおくといていってしたが、このあたりは田畑がきれいに整頓され、すんだ播種法である密播がおこなわれているといつて感心していた」(同二三四～三五頁)。みな、あちらこちらの部屋に行き、話題を交換し合つた。火野は亀田東伍氏と食堂で歓談し、日記に次のように記している。

○ 食堂で、朝食、昼食、話はずむ。亀田さんと甌右エ門さんのこと話す。かへりたがつてゐるが、日本では手ぐすね引いて待つてゐるので、簡単ではあるまいといふ。密入国と北海道の赤ペラ事件、二度も無断で公演し、つかまると逃げてゐるし、官憲は恨み骨髄に撤してゐる。もう二年半になる。中国の芝居を勉強したり、日本の芝居の話をしたりしてゐるが、やはり役者は舞台に立つが本領といふ意見一致する。

(『中国旅日記』)

ここで書かれる翫右エ門とは、歌舞伎役者三代目 中村翫右衛門のことである。翫右衛門は、一九五二年五月二十四日、北海道の赤平町の小学校で、自身が率いる劇団前進座が無許可で公演したことから警察が住居侵入罪で劇団員を逮捕し取調べた。翫右衛門にも逮捕状が出たが、警察から逃れて地下生活をしながら舞台には登場していた<sup>④</sup>。その後、密出国して一九五二年十月二日から十三日まで開催されたアジア太平洋地域平和会議に参加し、およそ三年後の一九五五年十一月六日ようやく中国から帰国することになった<sup>⑤</sup>。そのため、火野の訪中の時期には、中国に滞在していたのである。火野らは「四時から学習。食堂車の横の部屋で一時間ほど。インド諸国会議の感想。みんな熱心である。」(『中国旅日記』)と記している。その他、文学や、美術の話もしたという。火野ら一行は、仲良く旅行し、新中国の視察をしているように見えるが、実際はそうでもなかったようだ。『赤い国の旅人』には、以下のように記す。

それぞれ肌合のちがう代表たちは、なかなか批判的で、またときに感情的、排他的であった。そのためいつとはなしに、二つの世界とはまた別に、文化人、学者、経済人、労働運動家、技術者、婦人、という具合にグループができてしまつて、格別対立はしないけれども、フラクション同士の批判は相当にするどくきびしいものであった。どのグループにも属さず

孤立している人も何人かあった。四、五人集まるとすぐ他人の悪口をいう始末なので、私などもかげではどんなことをいわれているかも知れないと苦笑するのだった。

(『赤い国の旅人』一三六―七頁)

列車は進み、外の景色は次のような感じだった。

○ 窓の外の水田の中に円形がいくつもある。そこへコヤシ(堆肥)をいれて、おくものらしい。

○ すれちがふ貨物列車。満載されてゐる兵隊。強さうな歴史戦兵。復員で故郷へかへるらしい。珍しさうにこちらを見てゐるならんだ顔。頭髮をのばしてゐる者が多い。

(『中国旅日記』)

火野らは、車外の様子を見ながら夕食をとり、武昌へと向かっていった。

三、四月二十四日 武昌 漢口

四月二十四日、四時十九分、武昌站着。二両だけ切りはなし、七時まで寝かしてくれた。その後、バスで揚子江の渡船場に着了。火野は、昭和十五年六月、宜昌戦線に従軍した帰りにこの武昌駅から弟政雄が駐留していた山坡街まで行ったことがある。火

野は、揚子江を見て次のように懐かしんだ。

久しぶりに見る揚子江である。ひろびろとした赤いながれは昔とすこしも変っていない。珠江よりはもっと巨大な不気味な川。二千三百マイルも大陸を縫ってながれ、千二百マイルも汽船を遡航させる大河は、日本の川という観念からはみだしている。ジャンクがいく隻も浮かび、何軒も小屋を立て、豚や鶏を飼っている途方もなく大きな筏がくだってくる風景も昔のままだ。

〔赤い国の旅人〕一三八〜九頁

揚子江を、「飛浦号」船で渡る。この時、昔と違って、「揚子江の堤防が以前よりはずっと高く築かれていることと、見わたすかぎり堤防のうえで、何千とも何万とも知れぬ人たちが働いている」〔赤い国の旅人〕一三九頁)のが分かった。「工事のための石、煉瓦、砂、セメントなどが方々に積みあげられ、なおトラックがしきりに資材を運んでいた」(同)。大規模な堤防工事をしていたのである。火野はこの堤防工事に関心を持ち、尋ねると通訳の呉君がこたえてくれた。

昨年六月から十月にかけて大洪水がありました。昔なら長江が氾濫すれば、没法子、しかたがない、あきらめるといいうわいで、水びたしにされるままでしたが、昨年はいつもとちが

いました。毛主席の指導の下、二十三万以上の人民が総動員して堤防をきづき、とうとう武漢市を水から守りました。洪水と闘争して勝利を得たのです。そして、今年からはどんな大洪水がきても、水を一滴も武漢市に入れないように、あはやって恒久的な堤防工事を急いでいるのです。

〔赤い国の旅人〕一三九〜一四〇頁

このように呉君は答えた。続けて、次のように述べる。

雨季前に完成するはずですが。蒋介石の時代にはこういうことは絶対にできませんでした。私たち中国人は長い間苦しめられてきて、なんでもすぐに、没法子といってきたものですが、解放後はその言葉をすてました。有法子―方法がある、やればなんとかなる、そんな風になりましたです

〔赤い国の旅人〕一四〇頁

すなわち、共産党国家としての新中国では、国民一人一人が自信を持ち、簡単にはあきらめない強靱な精神を持つようになつたというのである。だが火野は、「闘争と勝利―革命家の好きな言葉である。」「中国人が自信を回復したということは軽々に見すべしすわけにはいかない。私の脳裡ではいつでも無意識のうちに、日本と中国とが比較されて考えられていた。」「赤い国の旅人〕一四

○頁」と、手放しでは喜ばなかった。常に日本と比較し、慎重に、新中国を視察しようとする態度が感じられる。漢陽を左に見ながら、ハイヤーとバスとに分かれて乗車し、十五分ほどで、対岸の漢口棧橋に着いた。火野ら一行は、江漢飯店というホテルに宿泊した。火野は三一四号室に、坂本徳松氏と同宿した。坂本氏は「草野心平君や私の親友宇野逸夫と友達で、ものわかりのよい温厚の紳士」（『赤い国の旅人』一四一頁）という。ホテルで「久しぶりのやうな洋食、ハムエッグス卵3。」の朝食をとった。ホテルには閲覧室があった。閲覧室は、「本棚には書物がびっしりつまり、卓にはたくさん雑誌がならべてあった。内容はすべて赤一色。ソ連の雑誌もある」（『赤い国の旅人』一四一頁）。

午前十時、車を連ねて出発した。ホテルの前は「日本人を珍しがってホテルの前に集まる市民たち。服装は一定されてゐて、背広服などはどこにも見ることができない。」（『中国旅日記』）とあり、人民服の中国人が集まっていた。「道路がきれいになつてゐる。チリが一つも落ちてゐない。ハナをかんだ紙もすてられない」（『中国旅日記』）。中山大通りを通つて、解放大通り、中山公園へ行き、漢水鉄橋のところへ着いた。たくさん人民解放軍の若い兵隊が肩章なし、ゲートルなしでいた。「○鉄橋の入口に歩哨、鉄砲を横に。○橋上に動哨、背に眩い銃口を下に」いた。「けたたましい京劇の銅鑼が鳴りひびき、あの独得のかんだかい歌声がつつたわつてくるのは、近くにラジオの拡声器がある模様だった」（『赤い

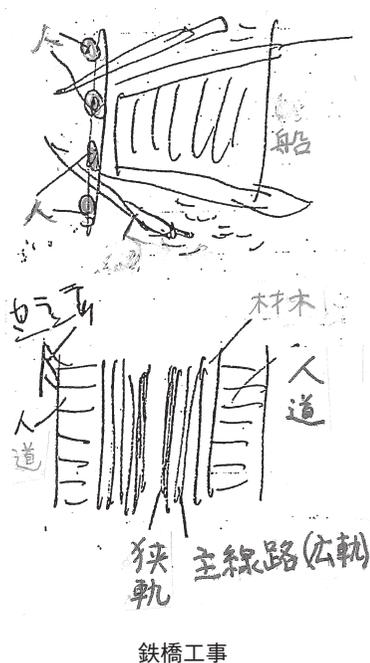
国の旅人』一四二～三頁）。鉄橋は完成していた。現場の責任者の説明によると、予定は一年だったが「去年の洪水にもかかはらず十一月と七日で完成。労働者の熱心、ソ連指導者の適切」な指導があつたためで、「水が深いうえに流れが急なので、冬の渇水期にむずかしい部分をやつた」（『赤い国の旅人』一四三頁）。という。鉄橋の材料は全て中国産で、長さは三六〇mであつた。火野は『中国旅日記』に次の工事の絵と説明メモを記している。

河底から4～6m

←

河底から上 29m

○ 橋の全部の材料 山海関の橋梁工場がつくつたもの。



鉄鋼も国産。

- 沿岸 赤土を船に積む仲仕たち、日本のとかはらない。
- 将来複線にするための張出橋脚。
- 見学者多数。
- 揚子江大鉄橋 汽車、自動車<sup>人</sup>、二段<sup>道</sup>

〔中国旅日記〕

この大鉄橋のそばには「ジャンクがずらりと繋留され、兩岸の堤防からひらけた広場には赤屋根、赤煉瓦の新築家屋がならんでいる。クルミ型に反った鉄橋はウスネズミ色に塗られて、近代美をほこっているようだった」〔赤い国の旅人〕一四三頁。

その後火野たちはそこを引きあげ、あまり遠くない工人文化宮に行った。工人に対する設備が十分に整えられ、『中国旅日記』には次のように記されていた。

- ◎ 工人文化宮（橋口） 入場料―一般とる。十銭 1166  
6平方m、1950年―1951 完成
- 文藝庁 光荣榜 ○ 運動場（バスケットをやつてゐる）
- 図書館 3万冊 200名 収容
- 「文学革命」鉄工、新世界、文芸報。
- 戲子彰（映画館） 今天夜曲 七時半開演

〔漢王大破東海島〕

〔中国旅日記〕

広大な敷地に、図書館、映画館、運動場などがあり、どこにもある労働者表彰の光荣榜が立てられてあった。日曜日なので労働者がそれぞれリクリエーションを楽しんでいた。掲示板に、工人がかいたらしい稚拙だが皮肉な漫画がはりだされてあった。火野が撮影した写真と『中国旅日記』に火野が描いた漫画の絵をあげる。



1955年 火野葦平撮影  
工人文化宮 掲示板



火野葦平自筆

さらに『赤い国の旅人』にはこの写真や絵の説明について、次のように記されている。

左よりに描かれた日本陸軍大将の軍服を着た骸骨が、左手に鞭をもって上方にある一枚の絵をさし示している。その絵には一九四五年の年号が入られ、八字ヒゲをはやした日本人が胸に刀をつきたてられて死んでいる。骸骨は右手にいる、U・Sの帽子をかぶったアメリカ兵になにか教えている態である。アメリカ将校は一冊の大きな本をかかえているが、それには「侵略的方法・東条著」の文字が入っている。説明文―米帝国主義「サンキユウ、侵略の先輩、たいへん講義はよ

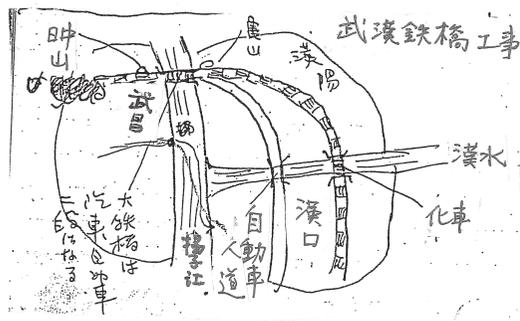
くわかった。さよなら」東条「待ちなさい。まだ最後の一课がのこつとる。これを忘れるな、これを忘れるな」

〔赤い国の旅人〕一四四頁)

火野は、この漫画を見て「中国人がなおどんなに日本の侵略を憎んでいるかわかるようで、私は気がまた重くなった。『反对日本軍国主義復活』という書きポストターも貼ってあった」と述べている。

漢水がもうすこしで揚子江へながれこむあたりに、自動車鉄橋が架設されつつあった。これはまだ橋脚ができただけだ。日曜なので作業を休んでいたが、労働組合の責任者がきて説明してくれた。火野書いたメモには以下のようにある。

○ 漢水 流れがはげしいので、上る船、困難してゐる。タキギを積んだ船ブツつかり口論 下る舟早い。



武漢鉄橋工事

人道 コンクリート橋脚だけ出来てゐる。

○ 自動車鉄橋。(日曜で仕事休み)

○ 労働組合 (タン) さん—武順から漢陽へ。北と南をレンケツ、揚子江大鉄橋につづく。

330 m 幅 26 m、自動車四台ならべ三輪車、人道をふくむ、1954年10月30日起工、本年度完成計算。機械利用、コンクリートミキサー、一回1400リットル、生産力高い。重要な水上工事完成、予定より早くできる見込み。

○ 材料をはこぶ民船 (レール 鉄管)

○ 長いレールを二隻にわたしてある。石船

○ 三交替 怪我 非常に少い

安全生産 3m以上は安全带。



〔中国旅日記〕

労働責任者は「去年十月末に起工した。本年末完成の予定だが、いちばん困難の水上工事がすでに完成したので、予定よりずっと早く架橋できる見込み。長さ三三〇メートル、幅二六メートル、自動車四台ならべ、三輪車、人道もふくむ橋にいたる。三交替で働いて居り、安全生産をモットーとして、三メートル以上になると安全带をつけて仕事するので怪我は非常に少ない。」〔赤い国の

旅人』一四五頁)などと説明した。やがて、揚子江にかける計画の大鉄橋と、この漢水の二つの鉄橋とが関連したものであると聞かされて火野は考え込んだ。

右の鉄橋をわたった汽車と、左の鉄橋をわたった自動車とは、漢陽の亀山で合し、上段が自動車、下段が汽車という二階づくりの揚子江大鉄橋を通って、武昌の蛇山に出る。大計画といわなければならぬ。妖怪の川たる揚子江に橋をかけることなど、昔は荒唐無稽の話とされた。ところが、それはすでに着工されていて、来年度は完成して汽車が開通するという。長江の洪水とたたかって勝利した中国人が長江そのものに挑戦しているのである。これもきつと勝利に終るであろう。これまで支那人にはできないと考えられていたことが、着々と片はしから実現している。私はこれを恐れなければならないと思った。

〔赤い国の旅人』一四五頁)

さらに火野は次のように考えはじめる。

私は独裁専制政治の威力というものを考えて、力の政治のありかたについて思いめぐらさずには居られなかつた。奇妙なことに、私は戦時中の日本大政翼賛会を思いだした。無論、その根本精神は正反対なものだが、外形はすこぶる似かよつ

ている気がした。国策を貫徹するための全体主義ファッション体制、愛国的国家総動員、現在の中国の政治が赤色ファッション体制であるかどうか、私にはまだわからない。すべては北京に行つてからの勉強だと思つた。

〔赤い国の旅人〕一四五―六頁

火野は、中国が国策を超速スピードで推進し全てのことを統率して改革し、進めていくことに一種の不安感を抱いている。ただ、注意しなければならぬのは、「現在の中国の政治が赤色ファッション体制であるかどうか、私にはまだわからない。すべては北京に行つてからの勉強だと思つた」と、早急に断定することを避ける慎重な姿勢が見られることである。街の様子についても火野は次のように記した。

○ バスでかへる。広東でもさう思つたが、漢口にも當（タシ）ン）が見あたらぬ。昔はいたるところにこの當の文字が眼についた。亀田さんにきくと、質屋と高利貸は徹底的になくしたといふ。人民銀行、金融合作社、信用組合などができて、金のやりくりをうまくやつてゐるやうである。

〔中国旅日記〕

火野によると、バスから街を見ていると、今はなくなつてい

ものに気づいたという。人力車と「当」である。「当」は質屋である。広東でも見つからなかつたが、やはりなくなつていた。「質屋とか金貸しなど、高利で人民を苦しめていたものは一掃された、国营の人民銀行、金融合作社、信用組合などが庶民に有利な条件で、零細な金の融通をしてくれることであつた。」〔赤い国の旅人〕一四六頁）人力車は「たまに見つかると、それは人間ではなくてみんな荷物を積んでいた。それらの車ひきはみすばらしい風体で痩せかけて居り、なお貧困は根づよくのこつていと思われた。乞食と思われる者もいた」〔赤い国の旅人〕一四六頁）という。さらに中国人の服装について次のようなことを記している。

○ 紺色中国。にぎやかな街の人出、着物は紺一色、簡衣、服装の改革つていしてゐる。昔風のもの全く見ない。支那服の華麗なものは日本のスーブニール店で売つて居り、アメ公が買つてゐる。苦笑。男も女も同じ紺衣。男女同じ色となると、他の色はおかしく、この紺が一番のやうだ。落ちついたよい色である。

〔中国旅日記〕

続いて、火野は、「背広などは全然見かけないし、あの両股が切れている中国婦人服の優美な旗袍もまるで見あたらぬ。旗袍は

ふだん着であったように思っていたが、それすらも華美とみえるほど一切が地味になったものようである。女には白粉気がまるでなく、紅もつけていないので、ちよつとみると男か女かわからない。〔『赤い国の旅人』一四六〜七頁〕と述べる。そして、このような、男女とも紺一色の没個性の服装をさせられている中国の人々を見ながら、次のように記す。

日本も戦時中には、儉約質素が奨励され、「欲しがりません勝つまでは」というスローガンがつくられたことがある。女はみな元祿袖のモンペ姿にだった。振袖を着て街に出たりすると、袂で長い袖をちょんぎられたりした。それと似たものかも知れない。派手な支那服は日本のスーヴニール店にかざられ、アメリカ兵がこれを買っている。バスのうえから、どこまでもつづく紺のながれをながめながら、このごろのソ連では、「白粉をつけてなぜ悪いか」というようなことが大問題になって論じられていることを思いだし、人間の意志と忍耐というものについて考えさせられた。

〔『赤い国の旅人』一四七頁〕

火野は、だんだんと人民服で質素儉約をさせられている中国人民を見て、日本の戦時中の禁欲生活の省令スローガンを思い出し、「人間の意志と忍耐」がいつまで持続するのかについて考えはじめ

るのであった。

その後、火野らは、江漢飯店にかえって昼食をとった。この江漢飯店には、一階に「奕棋室」「彈子室」（タマツキ）がある。

○ 昼食。豪華大菜。食べきれぬ。すこし食ひすぎのやうなのでひかへる。インド料理がひどかったので、おいしすぎるのである。みなよく食べる。〔『中国旅日記』〕



1955年 中国人民服の人々

午後は二時集合。バスとハイヤーで別れて出発した。渡船に乗り、漢水に入る。「揚子江をさかのぼる。多くの船、魚をとる漁師、四ツ手網、アミ、釣りなど。水上は写真をとつてはいけな」といはれる。漢水に入り、給水船に横づけ、上陸」（『中国旅日記』）した。武漢第一棉紡織廠（武漢国棉一廠）見学する。工場のすぐ前の堤防からあがると、大きな石がころがったままになったりしている。去年の大洪水の惨害の跡のことだった。労働者と従業員が総力をあわせ、塀のうえまで土嚢を築きあげて、ついに工場には水を浸入させなかったのだという。大規模な築堤護岸工事に進められているが、洪水の惨劇のあと片付けはあとまわしだったようだ。工場長劉錦堂さんが出迎えてくれた。火野らは、事務所二階の客間で、劉さんから工場の概要を聞いた。その時のメモは次の通りである。

○ 劉錦堂氏（工場長）——（武漢第一棉紡織廠）

1951年5月、測量設計 6月に起工。

1952年<sup>マ</sup>月、工場完成 6月試運転 鑄型コンクリート建、天井屋、中空煉瓦（ブロック？）通風、暖房 冷房、労働者健康保護、托児所<sup>マ</sup>、鋪乳室<sup>マ</sup>、子弟学校、衛生室、浴室、理髮室、食堂 独身宿舍、家族村宿舍、幼稚園。三つの特長

①測量設計をふくめてすべて中国の技術 ②機械は国産品、部分品は外国のがある。③労働者の95%は新しくよんで来た

若い工人、18才位。

○ 生産 三交替、勤労時間7時間半、食事30分を入れて8時間。労働組合の方で文化学習、勤労者の数 1500位 初級小学校、1〜4年、高級小学校 5〜6年、初級中学校程度のもある。

○ 文盲は一人もゐない。高級中学程度 新聞や本は読める。

○ 工人会 娯楽活動、ダンスパーティー、映画、バレエ バスケケット 演劇などをやつてゐる。 （『中国旅日記』）

ここにあげたメモは、『赤い国の旅人』によると次のようなことらしい。この工場は一九五一年六月起工、翌年五月完成、六月試運転をやり、操業を開始した。測量設計はすべて中国人技師がやり、部分品の若干をのぞいて、機械は全部国産品、工員の九十五パーセントは新しくよんできた若い労働者で平均十八歳くらい、約二四〇〇名（うち女子一六〇〇）、労働者の健康保護には特に注意し、工場にも、通風、暖房、冷房の装置がある。托児所、哺乳室、子弟学校、衛生室、浴室、理髮室、食堂、独身宿舍、家族村宿舍、幼稚園等が付属している。勤労時間は七時間半、食事三十分をあわせて八時間、三交替制。文盲はいないが、なお労働組合の方で文化学習をやっている。工人会は娯楽活動もさかんで、ダンスパーティー、映画、バレエ、バスケケット、演劇などをやる。

○ 技術学習。

○ 生産状況—1952年6月操業の二年後、国家計画にもとづいてやる。年を追うて増える。はじめ工人、経験がなかった。52年上半年、単位生産量、私営工場に追いつく。工人の勉強と自覚による。生産水準が高まるといふことと、工人の福祉増進とが平行することを工人たちがよく知つてゐる。一九五二年 綿の浪費がひどかつたのを工人たちが自発的に改革した。

〔中国旅日記〕

はじめ労働者も経験が少なかったが、工人自身の勉強と自覚とによつて、しだいに私営の紡績工場に追いつくようになり、国家の生産計画を満たし得るようになった。一九五二年度は綿の浪費がひどかつたが、工人が自発的に改革したという。火野ら日本代表団たちには労組代表や労働運動家が専門なので、工場に来ると、いろいろな質問が出る。例えば次のようなやりとりがあつた。

「労働者は工場の経営にどの程度に関与できるのですか」

「経営と企業の両方に参与できます。労働組合は三ヶ月に一回会合をひらき、工場に対して意見をのべます。いうまでもなくその目的は国家計画の完成にあります」

「団体交渉というようなこともあるのですか」

「たれかがそういったので、みんなどつと笑つた。それをカバ

ーするように、常久さんがきいた。

「労働組合には工員全部入つているのでしうかね」

「いいえ、入つていないのも少数あります。工員だからといってすぐ加入できるというわけにはいきません。しつかりした紹介者があつて、思想の進歩がたしかめられないと加入できません。工員になつても共産主義も、社会主義も理解しない者もありますからね。みんな若かつたので組織もおくれました」

「なるほど、日本と反対だ。日本では誰でも、思想のフニャフニャな奴でも、頭数を増すために組合にひっぱりこみます。ところで、賃銀はどんな風になつていましよう？」

「大体一ヶ月五十円くらいですね。最低賃銀は三十円、責任の職にある者で最高六十円から七十円です。生産によりますから一定して居りませんが、男女の区別はありません」

「たいへん安いようですね」

「住宅、その他の福利施設が別にありますし、物価が安いですから」

〔赤い国の旅人〕一四九頁〕

以上のやりとりは、『中国旅日記』では次のように記されている。

○ 90%工人、中に住む。給料、生理休暇、労働保険といふ。

○ 独身宿舎、タダ。国家规定以外の福祉、労働組合でやる。工場長資金、家の貧しい子に救済の意味でやる。管理方針―長責任制。生産地域管理制、現場主任は全部責任を果す。

○ 生産指導―計画管理、中心は操業計画。生品の質、量、材料の取扱等、出現。

○ 工人 男子800。女子1600。

○ 工人会に参加してゐない者少数。(若いため、□□ができるのもおそかつた) すぐに入れるものではなく、紹介者、思想の進歩如何、(日本はだれでも入れる、能力、思想などそつちのけ)

○ 給料 50円位(一ヶ月) 日本金で7500円、最低賃金30円、最高―60―70円、一定しない、生産による。

(『中国旅日記』)

通訳の蘇さんは、こまかい点までも的確に伝え、火野はすこしも曖昧さがないのに感心したという。そのあと工場を見学するのになつた。白布のマスクをわたされた。続いて、次のようにある。

(<sup>織、スイ</sup>) スピンドル5万 21番手―22番手

生産者 1缶、1時間 28〜29キログラム

○ 工人は経営と企業とに関与できる。労働組合は三ヶ月に

一回会合をひらき、工場に意見を述べる。国家計画完成。

○ 工人会学習、政治学習、文化学習。

● 業務学習

○ 経営協議会 全国的紡績工人会で契約等検討、正式決定。工場と工人。(『中国旅日記』)

工場内は日本の紡績工場と大差はなかった。子供のような若い女工が廻転するうつくしいスピンドルのままで、熱心に機械をみつめながら働いている。火野は、「思いなしか、搾取のなくなった世界で働いている労働者たちの顔は明るいものに見えた」という。さらに、次のように記した。

劉工場長の解説のなかに、私営の工場に負けぬようになったという言葉があつたが、革命後もまだ中国にはたくさん資本家がいるのであつた。社会主義建設はなお初歩のところにあつて、そういう企業家の仕事が全部は国有になつていない。大財閥や大資本家はなくなつても、少なからぬ中小資本家がついて、統制下で諸種の生産をつづけている。中には何万も工員のいる私営工場があるとのことだつた。このため、政府の役人との間に、贈収賄、汚職、材料の横ながし、原料のゴマカシ等の犯罪がおこっているらしい。政治はむずかしいものと思つた。私たちは国营工場だけしか案内されないが、そう

いう私営工場も見たいものだと思つた。

〔赤い国の旅人〕一五〇〜一頁

日本は紡績工業はすすんでいるので、この工場を見ても大しておどろくものはなかった。むしろまだ貧弱のように思われた。ただ、中国産業は進む一方であるから、将来は日本をのりこえるかも知れない。工場外に出て、寄宿寮や托児所を見る。こういう工員住宅でもそんなにびっくりするほどでもない。国鉄労組の連中も、日本の方がりっぱだといっていた。しかし、やはり、一行の大部分の人たちは、すばらしい、感心した、という言葉をくりかえして。こうして、工場を充分に見学した後、渡船に乗って漢水を出た。風がない。方々の工場の煙突からまっすぐに煙が立ちのぼっている。まだ、四月の終りだから、揚子江のうえを行くと寒いくらいだ。江岸の護岸工事は日がかたぶくまでもつづけられていた。堤防ではたらく人たちが蟻のように見えた。

○ 午後五時半、ふたたび船へ、昨年六月から十月までの大洪水のあと、兩岸はさんたん。工場の門に30mまで水が来た印がつけてあり、道路上には泥や石があがつたまま、対岸は大規模な堤防護岸工事、大勢の人たちが働いてゐる。船は漢水を出て、左へ、揚子江本流。右手に武昌の黄鹤楼。船や工場のエントツの煙がマツスグにあがつてゐる。風のない盆地、

夏は有名にあつい漢口。「長江に三つのストローヴがある。南京、漢口、重慶」小学校の生徒が図画に、みんな煙をまつすぐにかき、昔はインド人の巡査 (watch man) がインドに避暑にかへつた。

〔中国旅日記〕

午後五時半、再び、舟に乗った。そして、六時に夕食をとり、九時五分前にホテル前に集合、出発し、武漢楚劇院に行った。簡素な芝居小屋で、見物人も朴訥な庶民階級ばかりであった。上演

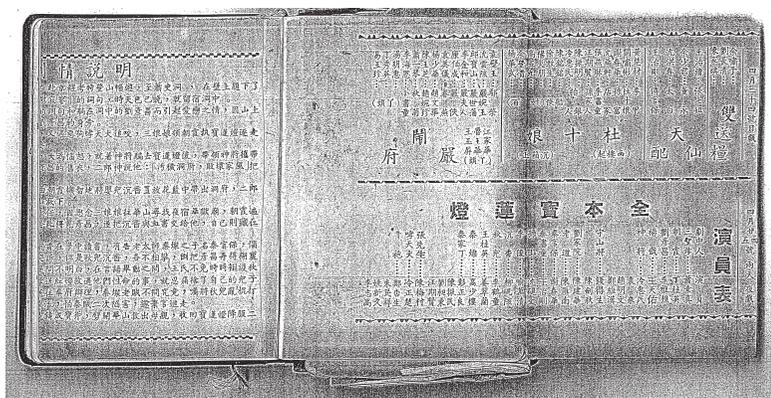


武漢楚劇團上演題目

節目は次の通りである。

服装が同じようなので見物席は下も二階も紺の緞の海のようなのである。

この地味な客席と正反対に衣裳も調度も絢爛豪華をきわめ、そのコントラストが印象的だった。「全本宝蓮燈」という古典劇はすば



武漢楚劇団上演題目

らしかった。私たちはみんな小型イヤホーンをつけた。これはアジア諸国会議に持って行ったもので、代表中の科学者の手製である。なかなか好評だった。これが早速役に立つ。台詞がさっぱりわからないので、蘇琦さんが翻訳してくれるのだが、大きい声は出せない。イヤホーンなら小声でも全部の人にきこえるので、他の客の邪魔にはならない。蘇琦さんの解説や翻訳は例によって要を得ている。ところが、「これは情緒纏綿たる恋愛劇なので、蘇琦嬢もいささかへこたれる部分もあるようだった。暗闇の中で顔を赤らめているかも知れない。」（『赤い国の旅人』一五二頁）と述べ次のように記す。この楚劇は日本歌舞伎に似ていた。

「この書生の劉彦昌にすね、仙女の朝霞がすね、好きになつて、劉彦昌も仙女を愛するようになります。そして、どちらも思いをこがしてすね、夫婦になつてすね、子供ができて、……」いつもの建設面の通訳とはちがって、すこし照れた様子がかがえる。コンミニストの蘇琦さんにも無論青春の血はたぎっているであろう。私は舞台よりも彼女の名訳の調子に興味があった。しかし、彼女は「わたしは君を思い、はふりおちる涙で袖をぬらす」というような翻訳をして私をおどろかす。

（『赤い国の旅人』一五二頁）

こうして、火野ら一行は、工場見学、そして、最後には観劇し、

盛りだくさんの四月二十四日の日程を終えたのであった。

## 終わりに

本稿では、広東から漢口に至るまでの、一九五五年四月二十二日から二十四日の三日間の、火野の中国視察について記していった。火野は、「中京通信」② 消えた泥棒市 目の辺り見る人間改革」で、この中国視察記について次のように記している。

広東についたとき、私は感慨無量だった。兵隊時代広東は一年間も暮らしたところである。そして、ここでも賊（ドロボウイチ）が私の十六年前の思い出の中にあつた。当時、私たちは頻々として盗難にあつたが、物がなくなってもあまり心配しなかつた。市内にある賊街市に行けば見つかったからである。ときには靴の片方だけなくなる。困るので早速 賊街市にかけつけると、ちゃんとガラクタの中にならんでいる。返せといつても相手は、自分は金を出してこれを買ったものだ。すでに商品になっているのだから、必要であれば買って欲しいという。その商人が盗んでいるわけではないから、やむなく私は自分の盗まれた靴を高いとか安いとか、例の調子で押し問答して、値切れるだけ値切って買ひもどさねばならなかつた。ところが、今度、広東に行つてみると、そんな賊街市などどこにもなかつた。広東のみならず、どここの街にも

そんなものは姿を消していた。<sup>⑥</sup>

火野は、新中国が猛スピードで変貌し、昔の面影が無くなったことに驚異の目を瞠つたのであつた。泥棒市だけでなく、新中国の街からは、人力車も、質屋も無くなつていた。また、中国国民の服装も人民服で、男女の区別もつかない程で、女性も質素で化粧すらしていなかつた。そんな中国の強力な、猛烈なスピード改革政策を視察しながら、なぜだか、戦時中の日本大政翼賛会を思い出したりする。国策を貫徹するための全体主義ファッショ体制を感じたのであつた。しかし、この広東から漢口視察の三日間は、新中国が、共産全体主義なのかどうか、その点に関して、慎重に考え、断定はせず、結論はつけていない。北京まで視察してから判断しようとしているのである。亀井勝一郎は、中国視察について記した『赤い国の旅人』について「火野の紀行には、大切なひとすじの思いが貫通している。日本人ならば、だれでも感じていなければならぬはずの、中国侵略に対する一種の罪悪感である。」と記し、「言つてみれば当然のことだが、そこからくる謙虚さと、偏見にとらわれまいとする用心と、それがや、古風な人情味を帯びて全編にこゝろよくみなぎっている」と評した。火野は、一九五五年、自らの戦争体験や日本の戦時中の国民の姿を振り返り、政治に翻弄される在り方に考えをめぐらせ、非常に注意深く、そして、謙虚に新中国の政策が一体どんなものなのかを視察してい

たのである。

注

- (1) 火野葦平「権・財力にひしがれ ドン底にあえぐ貧民階級 旅のあとをふりかえって②」(『西日本新聞』一九五五年七月七日)
- (2) 早坂一郎は東北帝国大学理科大学地質学教室の第一回生で、一九一五年に卒業後、一九一七年に理科大学講師(一九二〇年助教)となる。一九二八―四九年は台北帝国大学(国立台湾大学)教授として活躍し、その後金沢大学や北海道大学の教授、島根大学学長などをつとめた。古生物学の幅広い分野で活躍した。(『日本の古生代アンモナイト研究の創始者』東北大学総合博物館の全て参照) / [www.museum.tohoku.ac.jp/post\\_kikaku/.../tohokuUnit4.htm](http://www.museum.tohoku.ac.jp/post_kikaku/.../tohokuUnit4.htm)
- (3) 吉岡金市一九〇二―一九八六 八四歳。昭和時代の農学者。倉敷労働科学研究所員をへて大原農業研究所農業経営研究部長。同朋大教授 岡山理大教授 金沢経済大学長などを歴任。昭和三六年萩野昇とともに富山県神通川流域のイタイイタイ病の原因が鉱毒のカドミウムであることをつぎとめた。岡山県出身。京都帝大卒。
- (4) 無署名「中村甕右衛門に逮捕状 前進座事件」(『朝日新聞』一九五二年六月一日、三面) など参照。
- (5) 無署名「昂奮した帰国の日 中村甕右衛門 もうすぐ孫が三人」(『東京新聞』一九五五年二月二十八日、四面)
- (6) 火野葦平「中京通信 ② 消えた泥棒市 目の辺り見る人間改革」(『西日本新聞』一九五五年六月一日)
- (7) 亀井勝一郎「文芸時評・旅行記の重要さ」(『読売新聞』一九五五年一〇月三日、八面)

# The travel diary of Hino Ashihei on his visit to post-revolutionary China: From Guangdong to Hankou

MASUDA Chikako

This paper describes novelist Hino Ashihei's visit to China after participating in the April 1955 Asian Countries Conference in Delhi, India, as a Japanese delegate for cultural matters. Following the conference, 28 members of the Japanese delegation visited China, arriving at Shenzhen on April 20, 1955, and starting their tour of Guangdong on April 21. My paper entitled "The Travel Diary of Hino Ashihei after Participating in the 1955 Asian Countries Conference: From India to Hong Kong and Guangdong" (*Kansai Daigaku Bungaku Ronshu* [Essays and studies by members of the Faculty of Letters, Kansai University], September 2015) addresses Hino's visit to China as far as Guangdong. This paper focuses primarily on the subsequent tour of Hankou from April 22 to 24, 1955. It was found that Hino was observing and considering the situation in post-revolutionary China with great care and humility.

キーワード：中国 (China)、漢口 (Hankou)、「アジア諸国会議」 (Asian countries meeting)